

アンジャナの祈り 『シュリー・スカンダー・プラーナ』の物語に基づく

何千年もの昔、インドでシュリー・マタンガと呼ばれる賢人がいました。彼の気品と強さ、軽快さと驚くべき力は、賢人たちの間でトラとして知られていました。彼は南インドのカーナタカ州、キシュキンダ村のはずれの山の上に住んでいました。ある日シュリー・マタンガは、寺院でヴィシュヌ神を崇拝するために、その村にやって来ました。彼は祈りをささげてから、外にあるベンガルボダイジュの下に座っていました。そこに一人の女性が、マリゴールドの花輪、甘い菓子を置いたトレイ、絹の布をささげ物として持ってきたのに気付きました。彼女は豪華な装いをしていますが、とても悲しそうに見えました。寺院から出て来た彼女は泣いていました。

「娘よ」と彼は呼び掛けました。「どうしたんだ。なぜ泣いているんだね。来なさい。ここに座って話してごらん」

そして女性は、木陰に彼と一緒に座りました。そのときシュリー・マタンガは、彼女は美しいと同時に、少女ではないと分かりました。

「私の名前はアンジャナです」と彼女は言いました。「私の父はシヴァ神の信奉者です」

「素晴らしい」と賢人マタンガは言いました。

「私の父には息子がいません」とアンジャナは言いました。「そして父はシヴァ神の寵愛を得ようと厳格なざんげをしました。神が彼の前に現れ、この人生では息子を持たない運命だ。しかし娘を持つだろう」

「続けなさい」とシュリー・マタンガは言いました。

「娘の息子は、彼の知性と強さと献身の深さで世界中で有名になるだろう」アンジャナの声は感情が高まって言いました。「私がその娘なのです。でも何年たっても息子は生まれず、父は孫息子がいないのです」

「夫はいるのかい」

「ハイ、ハイ。私には素晴らしい、忍耐強く、愛情にあふれた夫がいます。彼はヴァーナラの族長です。名前はケサーリと言います。彼はあそこにいます」

シュリー・マタンガは彼女が指さしている方向を見ると、りっぱな、強健な、気高いサルが彼らを辛抱強く世話しているのを見ました。手招きされ、そしてケサーリは賢人に近づき、うやうやしくお辞儀をしました。シュリー・マタンガは彼に座るように促しました。

「私は考えられることすべてをしてきました」とアンジャナは泣いていました。「お祈りをします。ささげ物をします。何週間も断食します。ざんげをします—」

「非常に強力なざんげ」とケサーリが追認しました。

「すべて何も効果がありません。息子はいまだにいません」とアンジャナは言いました。

シュリー・マタンガはあわれんで彼女を見つめました。彼は彼女は己の願望から逃れられないとわかり、そうであるならば、マインドが彼女に平安を与える事はないだろう。彼は目を閉じると全知の境地に入りました。数分後、目を開けると、アンジャナに注意深く耳を傾けるように言いました。過酷な断食や厳しいざんげをしてはならない。その代わりに、スワミプシュカリーニと言う湖があるヴェンカタチャラと呼ばれる山に行きなさい。

「それらの吉兆にあふれた水面を見ているだけで、お前のマインドは静まるだろう」と賢人は言いました。「それらの聖なる水で沐浴しなさい。ヴィシュヌ神に祈りなさい」

「そう致します」とアンジャナは言いました。

そして、シュリー・マタンガは、青々と茂った、甘い香りのする薬木がたくさんある田舎で山の上のもう一つの聖地について彼女に話しました。「そこには滝から流れる水であふれている深い水辺がある。そこにしばらく滞在して、風と呼吸の神であるヴァユ神にささげ物をしなさい」と彼は言いました。「彼に祈りなさい。彼を瞑想しなさい」

「それだけですか」とアンジャナは言いました。

「それだけだ」とシュリー・マタンガはほほ笑みながら言いました。「自分の呼吸を楽しむことを学びなさい。それであなたの全身全霊を養わせなさい。呼吸の中にあるプラーナ、生命力を発見しなさい。時が来ればあなたが熱望している息子を身ごもるだろう。彼は来る。それはあなたと息子の運命なのだから。そして彼が訪れたら、彼は無敵だろう。悪魔でも、人間でも、それはあらゆる武器、害虫、動物でも彼を殺すことはできないだろう」

このようにして、アンジャナと彼女の夫は、賢人マタンガの命令に従って出かけました。それは何マイルもの旅でした。カピラ・ティールタで、シュリー・マタンガが話した湖を見つけました。アンジャナはそこの清涼な水で沐浴をしました。ヴィシュヌ神の霊廟でお辞儀をして、彼と彼の化身であるヴァラハ、イノシシにささげ物をしました。そして、彼女とケサーリは旅を続け、森の細い道を通って行きました。彼らの周りにはあらゆる果実を実らせる果樹——マンゴー、西洋カリ、イチジクやアーモンドがありました。道は陰しく、太陽は暑かったのですが、ついに滝が見える曲がり角を回りました。

その瞬間、アンジャナとケサーリは、岩石の下に滝になって落ちる水で立ちすくんでしまいました。太陽が水のしぶきで虹を描き、さざ波は渦となって下の滝つぼの深みに落ちていきました。

あたりは魔力に満ちたものでした。アンジャナは、自分がすでに安らぎ始めたように感じました。再び彼女は沐浴し、聖水を口に含みました。そして再び、彼女はヴィシュヌ神に祈りをささげました。

そして彼女は空気と呼吸の力であるヴァユ神について瞑想するために座りました。彼女はこれを一週間、一ヵ月、一年だけではなく、一千年もの間、毎日欠かさずにしたのです。そして、ずっと、ケサーリは彼女と一緒にいて、たびたび彼自身も瞑想に引き入れられました。

彼女は、自分の体が肺に空気を引き込み、それをゆっくりと何度も何度も吐き出されるのを見ると、この空気の流れが、彼女自身に活力を与え、周りの世界とつなげているさまを、驚異をもって眺めました。呼吸を見つめていると、彼女の切望はもう彼女を悩まなくなりました。マインドはより安定し、より強くなり、より至福に満たされるようになりました。ある時には自分が、きらめく滝のしぶきのように感じ、ある時には、滝つぼの上方にある暖かい空気の流れから舞い上がる鳥のように感じました。このように修行に集中していると、彼女自身の中に見いだした安らぎを愛するようになりました。

するとある日、彼女の内側深くにとどろくような一陣の風の音が聞こえて、その突風の中から美しい姿が現れました。即座にアンジャナは、それは彼一大気の神、この世の呼吸、ヴァユ神であると知りました。

ヴァユ神は言いました。「偉大で誠実な婦人よ、あなたの欲しいものをかなえてやろう。願いを選びなさい」

ヴァユ神の存在している瞬間に、アンジャナは何も欲しいものはありませんでした。それから、彼女の最も深いところから声が聞こえました。それは明晰で、意図を持った彼女自身の声でした。

「息子です」と彼女は言いました。「風の神よ、高貴なお方よ、どうぞ私に、息子をお授けください」

「それはかなえられるであろう」とヴァユ神は言いました。

それはあたかも、ヴァユ神が彼女に息を吸入しているかのようでした。そしてアンジャナには高揚した笑いと、声が言っているのが聞こえました。「なんて素晴らしい、なんて素晴らしいのでしょう」彼女の周りにはブラフマ神、インドラ神、そして彼らの配偶者たち、そして、女神ラクシュミーと他の多くの神々や女神たちが見えました。その中には賢人ヴァシシュタとヴェーダを編集した偉大なヴェーダヴァーサが見えました。それはあたかも全員で、彼女に拍手して応援しているかのようでした——彼女は至福にあふれた精神的修行の神秘を見つけて幸せでした。そして彼女が偉大な運命を果たせ幸福でした。

そして賢人ヴェーダヴァーサは雷鳴のように聞こえた声で話しました。

「おお、アンジャナよ、私の言葉を聞きなさい。汝は賢人シュリー・マタンガに従った。揺るがない修行でマインドの不純を解き放った。これから汝は偉大な功績をとげる英雄の息子の母となるのだ。彼の誕生はすべての人類の恩恵であり、そして彼の名前は三界にあまねく知られるだろう」

賢人が話した後、風はやみました。アンジャナは静寂に包まれて驚嘆させられて座りました。そして彼女の耳に、いとしい夫の声が彼女の名をささやいているのでした。目を開くと見慣れた彼の顔がほほ笑んでいました。

「私たちは息子を持てるんだ」と彼女は言いました。

ケサーリはうなずきました。「知っているよ。ヴァユ神がお前のところに来たんだね。風の音が聞こえたよ」

その年のうちに、アンジャナは強くて健康な赤ちゃんを産みました。彼は、父親ケサーリと同じくサルでしたが、風のように姿を変えて、呼吸のように力強く、穏やかでした。彼らは彼をアンジャンーヤ、アンジャナの息子と呼びました。後に彼はサルの姿をした神、無敵の戦士、そしてラーマ神の忠実な召使い、シュリー・ハヌマーンとして知られています。

『シュリー・スカンダ・プラーナ』はインドの古典で、物語、哲学的教え、賛美歌、どうしたら高潔な人生を送れるかという手引きが書かれています。最も初期の版は、6世紀に編集されたと言われています。しかし、それより何千年も前に起こった事柄も語られています。